

<歴史パネル> 前近代の日本における貨幣の発行と流通

パネル趣旨

早稲田大学 鎮目 雅人

20世紀末から21世紀初頭に各国で発生した金融危機と伝統的な金融政策手段の有効性喪失という事態は、貨幣のあり方に対する通説的理解の再考を迫っている。また、仮想通貨の出現は、中央銀行を流動性供給の中核とする近代の貨幣制度への挑戦とみることもできる。実は、世界の多くの地域において、近代の貨幣制度が成立する以前やその生成過程においては、金属を中心とする商品貨幣に起源をもつ貨幣と社会内部の信用から派生した貨幣が多様な展開を見せ、相互に密接に関係しながら流動性の供給が行われていた。例えば、江戸時代の日本では、幕府が独占的に供給する金銀銭貨と、両替商をはじめとする商人信用に（程度の差はあれ）依拠する藩札・私札が、地域的な多様性を持ちつつ併存し、その発行・流通形態は時代を通じて変容していった。そこでは、国家単位で設立された中央銀行を流動性供給の中核とする近代貨幣制度の下では覆い隠されてきた貨幣や信用のさまざまな様態が、より明確なかたちで観察できる。本パネルでは、主として織田・豊臣政権期から江戸時代の日本における貨幣の発行と流通に関するいくつかの事例観察の中から、現代にも通じる貨幣のあり方に対する新たな知見を探りたい。

報告1：16世紀日本における貨幣の発行と流通

安田女子大学 高木 久史

近世日本の貨幣システムの始点たる16世紀の貨幣システムに関する研究の近年の到達点を整理する。外生的供給・内生的供給によるものそれぞれの16世紀における供給の実態と制度、そして17世紀への連続性について論じる。具体的な対象は銭、米、金貨、銀貨、手形類、掛取引である。銭（輸入・国産模造）の不足に伴う、新たな基準銭の定義（ビタ）の形成と、銭以外の媒体・信用手段の使用とが社会で自律的に発生したことを中心に語る。

報告2：藩札発行における領主の機能

住友史料館 安国 良一

藩札における領主の持つ意味を正面から取り上げる。まず17世紀の貨幣をめぐる幕府と藩（大名）の基本的な関係を整理したうえで、藩札の発行・流通において幕・藩領主の果たした機能について論じる。両者の対立面よりも相補的な関係への変化に注目したい。また19世紀、発行の原資や裁判時の取扱など、身分制社会の枠組みを利用しながら、さまざまな貨幣形態・様式が地域社会のなかから生み出され流通したことを明らかにする

報告3：小規模藩による紙幣の発行

大阪商業大学 加藤慶一郎

藩札研究はその殆どが中規模以上の藩を対象にしており、100以上の小規模藩（知行高4万石未満）の紙幣に関する研究は皆無に近い。諸藩領が錯綜する播磨地方に所在した三日月藩（1万6千石）もその一つで、19世紀初頭～明治初年において数種の紙幣を発行した。当初は札潰れを恐れて一流の職人に製造させたが、明治初年には不換紙幣であっても藩債の返済と地域流動性の向上を可能にする「一挙両得」なものとの認識に転じていた。